

翻刻

中京大学図書館蔵

『先代御便覧』(中)

凡例

- 一 前稿に続いて中京大学図書館蔵『先代御便覧』を翻刻する。
- 一 漢字は通用の字体に改め、私に句読点を補った。
- 一 カタカナ、平仮名、清濁、改行は原本のままである。
- 一 検索の便を考慮して、和歌には通し番号を付した。

小高道子

本院御製 年序前後

不知夜月 年紀可尋

85 雨もよにうしや名たゝるきのふといひ
けふたにはれぬいさよひの月

翫月

86 いひしらぬ色にもあるかななに事か
なにのむしろか月にはへなき

松間月

87 雪ミむと引うへし松も秋をへて
木の間すくなき月にくやしき

月前鹿

88 もろともに山よりいてしさをしかの
入かたミせぬ月もなくらん

月前雁

89 はつかりも声をほにあげてしたひきぬ
あまのとわたる月の御舟を

ㄥ (32オ)

都月

90 みよやミよ都の富士のそらはれて
月もうへなき秋の光を

嶺月

91 影うすき月のかつらのはつ紅葉
くるゝおのへの松にもりくる

河月

92 秋の月いつくハあれと河つらの
うちよ伏見よいかにすむらん

寄月恋

93 たのめしハあらすなる世におもかけの
むかしおほゆる月さへそうき

寄月祝

94 月よみの光あまねく照すてふ
国も千五百の秋ハつきせし

冬祝言

承応元十月
禁裏御会

95 鶴亀もしらしな君か万代の
霜のしらきく残る日数ハ

ㄥ (32ウ)

仙洞御会始

春到管絃中 年序
忘却

96 谷かけも粟まくはかりふく笛の

声のうちなる春の、とけさ

ㄥ (33才)

聞持衣 禁裏御当座

97 よな／＼のきぬたの音にこの庵の

まかきの花の名にもねられぬ

河款冬 年紀

98 よし野川花ハなかれて行水の

すえせきとむる庭の山吹

御会始
遠山如画図
下句如此歟 猶可尋

99 つくりゑと霞やのこすさくころハ

またとを山の花の千枝に

應山之追善陽明故関白ならむ
未顕真実

100 妙なりや終に四十の翁の後

いまあらはる、松のことは

ㄥ (33ウ)

永源寺庵主へ被和韻

山陰道のかたはらに世捨人

あり。白茅をむすひてすめる

こと十とせはかりに成ぬ。かの

庵に銘して相江といふ。三公

にもかつさる江山をのそみてハ

詩情のとなし一鳥なかさる

岑嶺をあまなひてハ、禪定

を修してすてに詩熟し禪

熟せり。こゝに十篇の金玉を

つらねて投贈せらる。幽賞

やます、玩味あくことなきあまりに、

芳韻をけかし、つたなき

ことはをつゝりて是に

ㄥ (34才)

むかふといふ愧赧はなハた

しき物ならし。

101 うらやましおもひ入れむ山よりも

ふかき心のおく開のしつけさ

102 いかにそのすめるおのへの松風に

われもうき世の夢を醒さむ

103 おもへこの身をかけなから法のミち

ふみもミさらん人ハ人かハ

104 うくひすも所えかほにいとふらん

心をやなく人来くくと

105 こゝろしてあらしとたゝけとちはてゝ

物にまきれぬよもきふの門

106 山さとも春やへたてぬ雪間そふ

柴のかきねハ草青くして

107 去年よりもことしやしけき雪をもる

み山の杉の下折の声

108 この国につたへぬこそはうらみなれ

たれあらそはん法の衣を

109 世にもゆるハさてもおもふになにをかハ

人にもとめて身をハ奉めむ

110 故郷にかへれハかはる色もなし

花もみし花山もミし山

『 (35才)

年紀不知也。或人被語ニヨリ書留。年月不尋也。

野月

111 むさしのゝ草の葉分てみえそめて

露より下にいつる月影

月前浅茅

112 影やとす浅茅か露の乱きて

野風にくもる月もこそあれ

郭公幽

113 あらしこふたゝ一声ハほとみなし

とをき入さの山のはの月

見花思友

114 友こそハ色香のほかのいろ香なれ

とへかし花のさかり過さて

折花

115 折のこすあすミン人にミぬ人の

けふのためなる山のさくらも

秋夕

116 身をしほるならひよいかて世やハうき

人やハつらき秋の夕くれ

『 (35ウ)

野郭公

117 きゝそめてあかぬ野中のほとゝきす

みをくるほともそらにひさしき

鹿

118 秋ふかき山おろしにさそはれて

紅葉にまじるさをしかのこゑ

静見花

119 ことしけき世をもわすれてつくぐと

こゝろをわけぬ花にむかひて

忍待恋

120 しのはれはうれしき物のさよ更て

人ハねたるそ待にかなしき

山紅葉

121 わけ入は麓にもにすもみちはの

ふかきやふかき山路なるらん

社頭祝

122 いはし水なかれのすゑのわれらをも

神しまもらは世ゝにたえしな

ㄥ
(36才)

年紀不尋也

いへつくりたくひなし

123 いくよをへつきもミるへくりちのうた

くりかへしうたひなをかけもよし

年紀不尋候也

雨後花

124 雨のゝちの花そすくなき花にこそ

ましるとみえし青葉かくれに

花似雲雲 歟

125 あまつかせしはしとゝめむちる花の

雲のかよひち心してふけ

元和七年正月十九日御会始

対亀争齡

126 池水ものとききやとゝ万代を

われにちきりて亀やすむらん

詩哥御会ニ

若菜処々

127 雪消る野原の若菜つミそはへんん

ㄥ
(36ウ)

沢辺のねせり色そすくなき

山残春

128 限ある春ハかひなし外のちる

後こそ花ハにほふ山にも

月前釣翁

129 翁さひ誰とかむなと秋の水

すめるを待て月につるらん

寄鏡述懷

130 うつしミぬ我やなになるあはれよに

人の鏡はいまもこそあれ

慶安三年欵、朝覲行幸

御をくり物にりやう見と元

琴を進られ候しとき、ことち

つゝみの本にあそはされし御哥

131 しるしをく世のふることのをのつから

たえたるをつくあてならハなん

持明院黄門拝領御懷紙ノ

御製

ㄥ (37才)

槿帶露欵

132 花よりハしはしをくるゝそれも猶

夕かほけまたぬあさかほの露

浦月 年月不尋候

133 すまめかしすむうへかけてみるめなき

わか身をうらの波のうへの月

浦月

134 思やるあかしもすまのおもなれて

またミぬ浦の月としもなし

御会始 正保三年正月欵

池水似鏡

135 のとけしな世にハにこれる水もなき

春をうつせる池の鏡ハ

136 たくひなや柳の眉も春の池の

花の鏡に影をならへて

寛永八年正月十九日 仙洞御会始

旧冬御移徒也
詠松契春和歌

137 これやこの千とせのはしめあたらしき

ㄥ (38才)

春しるやとの庭の松か枝

或談

片恋

138 よしや人それにつけても思ひしらん

おもはんかたのよそにたにあれ

恨恋

139 をのつからミゆらん物をうらむるを

しらすかほなるそれも一ふし

忘恋

140 千重まかる霧やへたつる我かたの

春日つもりてとをき絶間も

141 うしやこのみ山かくれのくち木かき

さてもこゝろのはなしにほは、

朽木がきハ一説墨絵いふ也。

又、下絵の事ともいふ也。くち木かき

絵の惣名にもなるへき歟と也

「(39オ)

先年 御製候也

春月

142 月影ハそことなきまでかすむ夜の

木のしたやミそひとりはれ行

烏丸大納言 逍遙院之

143 木かくれものこらすみえて中／＼に

おほろ月夜ハくまなかりけり

此哥よりも 御製まさりたる

よし應山へ後日申さるゝと也

それを又、應山後日二

仙洞へ御物語也。予御前二

中内府祇候、いかゝと御尋

候へは、中内府しはらく

吟して烏丸申さるやうも

御さあるへきかと被申候由也。

「(39ウ)

鳳林和尚拝領御懷紙

この比の時雨に森のもみちも

いかゝと

144 とは、やなきぬかさ岡の秋の色を

きてみよとこそしかもなくくらめ

听寂和尚拝領御懷紙

風光日と新

145 きのふよりけふハめつらし花鳥も

ちよをかさぬるやとの初春

法印歴庵拝領

嶺紅葉

146 よそにミてまつや、ミなむかつらきの

たかまの山の峯のもみちも

年序忘却

松有歎声

147 風ふけはそらにしられぬ白雲の

里ちにひ、くハ松のこゑかな

落葉

148 散そひて山あらはる、木の間より

紅葉にかへて瀧そおちくる

暮眺望

ㄥ
(40才)

149 つり舟ハみえすなるより見えそめて

くれ行輿にちかきいさり火

森初秋

150 とは、やとおもふやしるへわか心

つれていく田の杜の秋かせ

旅泊歎

151 波風のさはきしよりも泊舟

思ひのこさぬ月そねられぬ

東本願寺拝領ノ御懷紙に

鹿声留人

152 からにしきこゝろたゝまくをしがなく

野への真萩の此ころの秋

竹田恕庵拝領

海眺望 寛文元十二月か拝領也

153 おもかけを浦の煙にさきたてゝ

かすまむ春も血鹿のちかのしほかま

後朝恋

154 身にそへて又こそいねめうつりかも

ㄥ
(40才)

またさなからの今朝の袂を

御会始

毎家有春

155 今すめる霞の洞の宿もあれと

なを九重の春そのときき

同

南枝暖待鶯

156 行雁ハあとにみすてん花のかに

うくひすいそけ花の初風

同

陽春布徳

157 宿毎にさく梅かゝも隣ある

春のこゝろをまつしらすらん

梅花告春

158 世をめくむ道にもうつせ天か下

ミナ春にあふ梅のにはひを

松下納涼

159 むかしきくをのゝえくたす松陰も

ㄥ (41才)

こゝにおほえてあかぬすゝしさ

寄月恋

160 面影の我にむかひてかきくらす

人ハさやかにミン月もうし

夕郭公

161 ほとゝきす夕とゝろきのまきれにも

待一こゑハなをさたかにて

霞春衣

162 花鳥のあやをりはへて朝霞

春のたつてふ衣きにけり

月前時雨

163 窓の月もりくる竹のさよ風や

しくれせぬ間もはれくもるらし

御会始

残雪半飛梅

164 梅やしるきえあへぬ雪のむもれ木も

かた枝花さく春のめくみハ

同

ㄥ (41ウ)

藤花久盛

165 いはひつる松にちきりて君と臣

あひに相をひの春の藤なみ

寄煙恋

166 人のためハ煙をたちし此ころの

おもひもしらぬ思ひかなしき

大猷院殿被薨し時

167 あかなくにまたきそ月のはつかにも

雲かくれにし影をしそおもふ

168 ほとゝきす宿にかよふもかひなくて

あはれなき人のことつてハなし

169 いとゝしく世ハ^にかくれぬ五月やミ

ふるや涙の雨にまさりて

170 たのもしな猶後のよもめのまへに

みることはりを人におもへは

171 たゝたのめかけハやたかくわか竹の

世々のみとりハいろもかはらし

近衛故禪閣一周忌尚嗣公被申歎

ㄥ (42オ)

未見真実

172 妙なれや四十あまりの霜の後

世にあらはるゝ松のことは

山家月 年月可尋

173 山すみの友とハいはし空の月

われもうき世をめくるとおもへは

湖月

174 はれてよしおなしたくひの秋の月

たか面影ににほの海つら

浦月

175 すまあかしすむらん影もみるめなき

わか身をうらの波のうへの月

たけかりの興ある日

袖にたきいるゝはかりも木の葉

いまたそめあへねは

176 霜の後又もきてミむ名にしおはゝ

さこそ八しほの岡の紅葉々

177 分ミれは草木もさらにことやめて

ㄥ (42ウ)

ㄥ (43オ)

野山か末の道もさへらす

池辺雪

178 みたれふす芦間やきえ間冬の池の

波ハ跡なくつもるしら雪

仙洞御当座

河眺望

御清書

179 いにしへのちきりにかけし帯はかり

一すちしろき遠の川波

180 ふかくなる青葉の山の麓川

夏霜しろき波の色かな

亭午月

181 かたふく^{かは}悔ある道そ月もいま

のほる空なき影をとゝめよ

見花恋友^歟

182 友こそハ色香の外の色香なれ

とへかし人の花のさかりを

題可窺

183 なにのはの世のふることにもれし菊

梅をわすれしうらみなしやハ

積雪

184 散そめてつもるをおもへをこたらぬ

まなひなりせは窓のしら雪

羈旅

185 ふるさとのたよりときけは文かきて

つくさぬほとのはれとハしれ

雪消春水来

186 絶たるをつくや雪けの山水の

すゑたのもしき春をみす覧

鶯告春

187 声ゆきて雲ゐの春を告くる也

埋木ならぬ谷の鶯

松

188 もゝしきやうへしわか世もおもふにハ

いく程ならぬ松の木高さ

梅近聞鶯

189 梅かゝも声のにはひもくらからぬ

をしあけかたの窓の鶯

『 (43ウ) 』

『 (44オ) 』

『 (44ウ) 』

夏月

190 松風も里ちにやかよふ夏しらぬ

月そまことの霜の色なる

聞持衣

191 遠つ人かへらぬ衣うつたへに

さそなねぬよの月ハさひしき

祝歟

192 九重の縄たゝすなり木の道の

たくみも世とのあとをおこして

「(45才)

右、寛永之比禁中造営之

時分、御当座御製二候。

古文真宝聖主得賢臣頌ニ

使下離^{ラシテ} 婁督^レタ、シ 縄^ヲ、公輸^{ラシテ} 削^レ墨^ヲ

云コトアリ。注ニ 離婁古ノ者

明日人也。公輸、古ノ巧匠也^{云々}。

又、末注ニ、言巧拙之理旦、使上之

所迷、則更使明目者正繩巧工

者度墨、雖崇臺五層長広

百丈、而規矩不乱者、工用之
相得故也、国不乱者、得賢之
效也。

山家

193 おもひ入心のおくのかくれ家に

すまはや山ハよしあらくとも

「(45ウ)

何かたへノ御幸ノ時か被遊歟。秘ニ聞也。

194 むかしみし野原ハ里となりにつけり

かすそふ民のほとハしらねと

此哥主人ノ雑談也。古哥ヲ

誦こみたる歟、不審。

風光日と新

195 民をおもふ道にもしるやしら雪の

ふるきにそめぬ春の心は

「(46才)

寛永二年歟

和哥御灌頂之刻御製

桂光院殿

式部卿宮被合点

三十首

早春鶯

196 長閑なる日影にうつる鶯や

初音おしまて春をつくらん

197 雪ハ猶今朝しもおそふ風ながら

春をたとらぬ鶯のこゑ

朝霞

198 昨日ミし遠山まゆもかきたえて

霞をのほる朝つく日かな

199 音あれし夜のまの波の朝なきに

かすミやゝかて立かはらん

夕梅

200 たか里の春風ならし夕月夜

おほつかなくもにほふ梅かゝ

201 一入の色こそまされ紅の

かきほの梅の花の夕はへ

紅いかゝと奉存候

『 (46ウ)

庭春雨

202 ふるほとハ庭にかすミし春雨を

はるゝ軒はの雫にそしる

203 春の夜の真砂地しめる沓の音に

音なき雨を庭にきくかな

見花

204 ミる度にミし〇色香ともおもほえす

代々にふりせぬ春の花かな

205 かくなからつくしはてはやつく／＼と

花にむかへハおもひなき世を

聞郭公

206 待つくるたゝ一こゑハほのかなれと

さたかにもきくほとゝきす哉

207 時鳥まつに幾夜を〇かさねても

きくにかひある初音ならすや

五月雨久

208 夕月夜ふり出しまゝに有明の

かけまでもらぬさみたれの空

『 (47オ)

209 一とせもおもふにやすく暮る日を

心にをくる五月雨の比

水辺蛩

210 せきかへし声にやたてぬ音羽河

ふかき蛩のよるの思ひも

211 蛩さへせきいるはかり流きて

やり水す、し川つらの里

遠夕立

212 此里は〇くもりもはてす一むらの

雲もとをちの夕たちの空

213 此さとハふく風はやミ天雲の

よそに過行ゆふたちの雨

樹陰納涼

214 影ならぬ霜もまことに結ふかと

木のまをもりの月の涼しさ

215 たちぬる、しつくもあかす片岡や

秋待ほとのもりのす、しさ

草花露

『 (47ウ)

216 春の山も忘れにけりな百種の

花野、露になひく心は

217 百種の花といふ花の色ことに

はへあ□ものや野へのしら露

霧中雁

218 南をやさしてきぬらん霧の内の

小車ならぬかりのつはさも

219 峯こゆるつはさハ消てくる雁の

声のミちかき霧の内かな

野鹿

220 聞なる、人やうからぬさをしかの

妻とふ小野の夕くれの声

221 女郎花なひくをミてもさをしかの

野をなつかしミつまやとふらん

深夜月

222 四方にミな人ハ声せて更る夜の

月そ心もさらにすみぬる

223 更行ハやとかる露も数そひて

『 (48ウ)

『 (48オ)

所えかほのよもきふの月

山紅葉

224 山つとに手折をミれハ庭の面の

木との千入ハつゆのしたそめ

225 もみち葉ハいかなる露かおく山の

山よりふかき色をミすらん

初冬時雨

226 ミし秋のしくれも今朝ハ色かへて

木葉ふりそふ軒の山かせ

227 やかてこそ雪もさそハめ冬きぬと

まなくしくれてさむき山かせ

河氷

228 から人の朝河わたり跡みえて

あさせたとらぬうすこほり哉

229 山川や紅葉となからとりはて、

こほりもかくる水のしからミ

連日雪

230 越路にハたゝ時のまに日数ふる

ㄥ
(49才)

都の雪のふかきをやミむ

時のまにみる越路なるらん

231 おれかへる枝より落て日かすふる

後しもあさき松のしら雪

浦千鳥

232 をのか妻まつハつよくも大よとの

うらミわひてやちとりなくらん

233 夕浪に立行ちとり風をいたミ

おもはぬかたに浦つたふらん

夜神楽

234 笛の音もかくらの庭のおもしろく

さゆる霜夜にすみのほるらん

235 さゝなみのかすくにしも三夜までに

236 うたふをあかす神や聞らん

忍恋

236 ○いかに猶人ハミるらん世のうきに

いひまきらハす袖のなみたも

237 身におはぬ思ひならすハなをさらに

つゝみてましを袖の涙も

ㄥ
(49ウ)

不逢恋

238 あハしとハ思ひさためてつらくのミ

いひはなたぬをなさけにやする

239 よしさらは我たにうつれつれなさの

人ハかはらぬ心なりとも

待恋

240 ふけぬとも猶や待ミんよひのまハ

さすかえさらぬさハリもそある

241 ぬれてもしとひこハさてもとはかりに

雨ふる 雨夜とてまたすしもなし

遇不逢恋

242 そのかミのうき身にかへれ此まゝに

あはすハありし夢を忘れて

243 このまゝに又もあはすハ中くゝに

ありし一夜の夢そくやしき

恨恋

244 しれかしなことに出てハいはすとも

みゆらんものを下のうらみハ

「(50才)

「(50ウ)

245 もらさしなそれにつけてもつらからハ

中くゝふかきうらみもそふ

暁雲

246 入ぬへきそれたにおもふ山かつら

月の行ゑにかゝらすもかな

247 さ夜ふかきおのへの雲にもれ出て

あかつきつくるかねの声かな

夜夢

248 おもふよりほかにやハ行よひくゝに

みる手枕の夢ハかはれと

249 ミしことを渡しもはてすあくる夜の

これもわひしき夢のうきはし

羈中灯

250 故郷にミし人ことのおもかけの

旅ねとひくる灯のもと

251 かりよらん里もわかれすくるゝ夜の

道しるへするともし火のかけ

山家嵐

「(51才)

252 猶^レさりに世をいとひこし心こそ

ミねの嵐ハなをうかりける

253 よしやふけ山にてもうき嵐にそ

今一きハ、おもひはなれん

社頭祝

254 松のはのちりうせすして住吉や

まもるも久し敷島の道

255 いのりをく今行末もかきりなく

猶吹^ととをせいす、川かせ

僻案愚点卅首

智仁

ㄥ (52オ)

古今御伝受翌年也

寛永三年御試筆

256 時しありときくもうれしき百千鳥

さへつる春をけふハ待えて

早春

隠岐国御奉納卷頭
寛永八

257 雲霞海よりいて、あけそむる

おきのとやまや春をしるらん

同

258 むかしたにむかしにもあらぬ百敷に

世との春のミたちかへりつ、

259 けふといへはつもるも雪のあさ沓の

あとあらはる、百敷の庭

深山鹿

寛永八九廿五
聖廟御法楽

260 鹿そなくすちやいかにと問人に

太山の里の秋をこたへて

261 をのかうへに何世を秋の山ふかミ

思ひ入らんさをしかのこゑ

262 秋ふかき太山^をおろしにさそ^{ひき}はれて

紅葉にまじるさをしかのこゑ

263 鹿の音にたちならひてもかたはらの

ミやま木ならぬ秋^木の色哉

264 鳴鹿のこゑにそこもるをのかすむ

山よりふかき秋のあはれハ

御法楽の御製かしこまりて

ㄥ (52ウ)

拝見仕候。先以深山里尤殊勝に

存し候。世を秋の山、すくのまゝにて

可然候哉と存し候ハ如何。太山をろし

不存耳にさへ、誠に秀逸の躰とも

申ぬへく存し候。これも隔て

付られ候ハ、劣候哉。紅葉も鹿の

声もともにさそはるゝ心にて可然
」 (53才)

存候。三山木愚意難弁候。

此字候説
停春賛^二逍遥院春の色にたち

ならひてハみ山木の心をしりて

にほふ花かも如此候。乍次言上候。

山よりふかき、如此より必よりも可候。

可然様、三光院など申欵。然而

山よりたかきよハひなともよりも

の心にて御さ候へきと存候間

尤珍重候欵。例の無正躰事とも

慮外に存し候由よくく

御とりなをし候て候

みち村上

光広卿言上如此

端両首之御製中にも

紅葉にまじる鹿の

こゑの風情始而出覧

無双に承候。奥御歌

松の色哉ハ木^との色と存候。

太山をろしのさそひきてと

候てハいかゝ吟未了候。

」 (53ウ)

池藤

265 池水そむらさきふかきさく藤の

をしのつはさの色も^をうはひて

暮春雨 正保比禁中御当座

266 この夕花ものこらぬ雨風に

さほひてかへる春のさひしさ

陽春布徳

御清書

267 世ハ春の雨にまさりて草も木も

」 (54才)

うるふめくみの露やあまねき

268 世ハさらにおさまる春そ下にある

司ハなる、き、すをもみき

梅花浮水

269 駒つなく誰ためかほに梅花

またきちりゆく春の山水

停午月

270 半天にのほりはて、そくれ竹の

夜なかき月も影そすくなき

虫怨

271 うちかる、真葛か中の秋風を

音にあらはして虫もなく也

寛文一五四禁中御月次

法皇御幸 何か御雑談候次、聖護院宮

此題ヲ申上ラレ候へハふと御庭ニ

法皇被遊候也

対泉避暑

272 枕せんす、しさハ猶まし水の

きよきなかれに月もうかへる

金森帯日哥以風早三位侍
法王観覧御添削

待花

273 ひとへにハあらしと思ふひきそへて
まつ日○かさなる宿の桜ハ花もしる覧

夕立

274 ゆふたちの雲ハ夕のうす、ミに

半天の日をかきくらしぬる
うす、ミ
如何

暁鹿

275 さをしかの二つま○や○一つれ○なき暁の
やこゑの鳥のもろこゑになく
こゑ

寒草

276 たか秋のこゝろにかれて朝かほの

まかきハ雪に色ものこらぬ
一二句
いか、

海旅

277 おほつかなミなともしらすこきうけて

（55才）

（54ウ）

（55ウ）

○波ハのちさとのよるの船人

螢火透簾

278 まきあけてまはゆきはかり玉たれの
三かせそひて 四 まてに 一

ひまもあらはにとふほたる哉
二丙 五

樹陰避暑

279 すゝしさハとこよもかくや橘の

かけふむみちに夕風そ吹

橘の陰

ふむ道

ふるき詞ながら

船中夏月

280 舟の上も夏なきかけのすミた河

月のをひかせ秋にふくらん

納経にハ時節

不相応候歟

月照寒草

281 花にのをく露より。も馴野へにかけとめて
ミし秋の 五のあは さ四

月こそかれね霜の下草
に夜かれぬ

山路落葉

282 ゆきかひを木のはにまよふ跡そなき
四先立入の 三路哉 五もとまらて

みちある御代ハ山のおくにも

篠霰散乱

283 朝日かけやゝさす堇もかきくもり
三ちる

霰たはしる玉さゝのうえに
二

ひろはゝあたにきえなむもおし

（56才）

寛文六三十四 新院御月次御会ニ

夢逢恋

烏亜相

284 さめてけりさらハ五十年の夢ならて

あはれあひミし程のはかなさ

法皇仰、先哥ハ珍重也。されとも二三句

さらハ五十年ノ夢ならてト云、語口ト四

五句あはれ逢ミし程のはかなさと

いふト語口同シヤウ也。如此。ゴロノ

同シヤウニナラブヲ哥ニ宜シカラヌ

事ニスルコト也。下句あひミし程の

あはれはかなきトアレハ、ゴロカハリテ

ヨキ由、法皇仰候旨、新院御物語也。

サテ後御添削アリテ

285 逢とミはせめて五十年のそれならて

何中くの夢そはかなき

如此御添削ニテ清書了

同日右題ニテ予

286 おもひあまり我やいてましたまさに

あふとみえつる夢そ夜ふかき

『(56ウ)

右、伊勢物語にむかし男みそかに

かよふ女有けり。それかもとよりこよひ

夢になんみえ給つるといへり。されは

おと思ひあまりいてにし。玉のあるならん

夜ふかくみえは、玉むすひせよ

トアリ。其心ニテ如此仕候。物語ノ

心トハカハリ申候。カヤウニ物語ノ心ヲ

引カヘ候テモ、キコヘ可申候哉。但

カヤウニハツカマツラヌコトニテ候哉。

物語ノ心ニカハリテハキコヘ

申サヌコトニ候哉。法皇へ被窺候て

被下候ヤウニト 新院御方へ申上。

翌日、新院仰、法皇へ被窺候へハ

物語ノ心ハ物語ノコトクニ仕タルカ

ヨキ也。後柏原院御製ニ

287 おもふをはおもふをこそハ世中の

ならひといふをいつはりにして

ト被遊たるを、物語ノ心ニハ相違也。

後柏原院ノ物語ノ心ヲ覚候。

わすれられたるにてハあさましきと

いふ事をハ、皆人しりたるコトナシ。是」(57才)

それさえ物語心ハ物語ノコトクナルカ

ヨキト云コト、サキくヨリ沙汰アル

事也。イハンヤ今時ノ哥ニハワサト

心ヲカヘタルトハ人ノ思ハテ、物語ノ

心ヲ覚ヘチカヘタルカト人ノ思フ

コト也。物語ノ心ハ物語ノ心ニカハラヌ

カヨキ由、法皇仰也ト被仰聞了。

先年モ羊ト云者カ詩ニユビヲ

屈シテ数ト云ヤウナコトニ亀手^{キンシュ}シテ

トシタリ。亀手^{カ、マテ}ハ不^スレ^レ亀^レ手ト云ハ

手ノコ、ヘテカ、ラヌコトヲ云タル

也。指ヲ折トハカハリタリ。

コレモ覺ヘチカヒカト其比沙汰

アリヌルコト候由

法皇御物語アリト也

寛文九正廿二新院御会始

栽梅待鶯 愚余分ニ

288 香をとめて待つ^{きく}くひすのとはす^{きく}やと

うへし^{ハあるや}かひあれ軒の梅かえ

御添削如右。三句とはすやと ㄱ (57ウ)

とはすやハとハ、キコヘカマシク候哉

源氏紅梅卷心ありて風のにははす

園の梅に待つ^{きく}くひすのとはすやあるへき

是もとはすやハあるへきニ候歟

但キコヘカタク可有候半む之由

窺申候

仰ソレハあるへきニテとはすやハト

キコユル ㄱ 是ハ

キコヘカタキ由仰也

同時 宣勝哥

289 うふるより待とはみらん御園生の

梅のたち枝にきなけ鶯

御園生トハフルクキシメシ^{サヌ}

由、法皇仰之旨、新院様

仰。洞のうちの新院御添削

御書改了

ㄱ (58オ)

去十五日書付窺申候内如此注被遊付遊了^{後日}

290 みし人の面かけとめよ清見潟

袖に關もる浪のかよひち

袖ハ清見カ關ナレ、ヤトアレハ袖ノ

浪ハ清見カ關モル通路ナレハ

ミシ人ヲカキタエテ跡モナク成行

面影ヲタニトメヨト云歟

291 浅茅生や袖に朽にし秋の霜

忘れぬゆめを吹あらし哉

春風漂泊ノ心ヲヨメル由、詞書ニ

アリ。哥ノ心ハなき人ノフル跡ノ浅

茅生ト成タルニトマレル人ノ涙ノ

露霜ニ袖モ朽ハテ、昔ノ人ヲ

忘レスミル夢ヲ余波ナク吹

サマス嵐哉ト嵐ヲカコツ心欵。

寛文六三十四新院御所御当座之内此哥

義理御盃、烏亜、余ニ申候ヘキ由 法皇

仰アリテ後、書付被 書 各拝見

292 夕くれハいつれの雲のなこりとて

はな橘に風のふくらん

夕暮ハ雲のはたてに物ぞ思ふ天津空

なる人をこふにて、ト候ヘハ、夕暮ノ

イツレノ雲ノナカメノ行衛ヨリ

昔ノ恋ラル、花タチハナノ香ヲハ

風ノ吹来ルラント云心欵

如此 法皇宸筆ニテ被遊付

各拝見。

〔付記〕 本稿は、平成十二年度科学研究費補助金（基

盤研究C）による成果の一部である。